

(10)WG 17：大土かぶり長大トンネル

部会長： M. Schivre（フランス）

副部会長： R. Schuerch（スイス）

担当理事： G. Seingre（スイス）

本WGは長大大土被りトンネル特有の課題や解決策等を各国との共有を目的に、これまでレポートを計4冊発刊している。30名が参加し、日本からは対面にて長田（大成建設(株)）と倉持（日本工営(株)）が参加した。

本会合では以下の報告と討議が行われた。

- ・2024年より作成が進められていた「大土被り長大トンネル工事における安全面に対する主なリスクの軽減」のレポートが5冊目として2026年5月17日に発刊された。レポートでは長大大土被りトンネル工事における安全リスクの整理や対策事例に加え、18件の実プロジェクトデータベースが収録されている。本レポートから紙媒体の配布からウェブサイトからのPDFをダウンロードで配布となった。
- ・ITA全体で進めるWG再編に伴い、WG名称を「大土かぶり長大トンネル」から「極限条件下でのトンネル」へ変更方針が示され、より対象範囲を長大大土被りトンネルに限定せず、高水圧、カルスト、地すべり、超巨大空洞、遠隔地施工など、極限条件下でのトンネルプロジェクト全般への拡大が提案された。
- ・次期レポートテーマについてブレインストーミングが行われ、候補として、高水圧下でのトンネル施工、地下貯蔵施設、山岳トンネル施工の機械化・自動化、未知の地質への対応などを挙げた。まずは極限条件とは何かを明確に定義し、その条件や評価指標の整理を優先すべきとの意見や、高水圧など特定の課題に焦点を当て、各国の事例を収集・分析したうえで実務的なガイドラインを作成すべきとの意見が出された。
- ・WG期間中に次期レポートテーマの結論には至らず、2026年6月のオンライン会議にて再度の議論となった。

（文責：長田翔平・大成建設(株)/倉持卓弥・日本工営(株)）

WG 17の活動状況はこちらから

[Working Group 17: Tunnelling In Extreme Conditions](#)